

# Animal "Mutilations" and the ETs

by Dr. Steven Greer

Copyright 1995

## 動物 “切断” と ET

スティーブン・グリア博士

著作権 1995 年

( [SiriusDisclosure のウェブサイトより](#) )

説明のつかない、奇妙な状態で切断されている家畜動物の報告が現れ始めたのは、1970年代である。いくつかの事件には UFO 目撃が伴っていた。動物の死骸にあった切り口は、もしかするとレーザーのような技術が使われたかもしれない、高度な切開手法であることを示していた。その最初の報告以来、タブロイド紙記者や UFO 研究者たちは、これらの切断がおそらくは非道なエイリアンによる残酷なキャトル・ミューティレーションであるとの観点から、人々に大量の情報を流してきた。この切断事件のすべてに ET (地球外知性体) が関与しているのかどうかは、未だ解明されていない。たとえ ET が本当に動物切断の一部に関与していたとしても、その行為は彼らの好意的な、慈悲深い動機から出たものだという、もう一方の解釈が議論されることもほとんどない。

これらの切断事件で外科的に切除された組織の多くが、旺盛な細胞増殖力を持っている。これらの組織には、胃腸管や生殖器官をその一部とする動物体の様々な部位が含まれている。これらの増殖力旺盛な細胞株は、毒性物質の影響を研究するのに最適なのである。次のように仮定してみよう： ETたちはこのような事件に関わったが、彼らの行為は、環境汚染物質が哺乳類の細胞組織に与える影響を監視したいという動機から出たものだと。そのような毒性物質により引き起こされた細胞レベルの損傷は、家畜の解剖により調査が可能になるだろう。解剖された動物から採取された細胞組織サンプルは、ETの研究室で詳しく研究されるだろう。私のこの善意寄りの解釈は、無力な家畜を苦しめ切断するという、冷酷非道なETによる何かの陰謀を示すものだという奇抜な幻想よりも、さらによく事実に適合すると私自身は考えている。しかし、タブロイド紙も ‘動物切断’ 研究者たちも、この解釈を述べたことはない。

CSETI (地球外知性体研究センター) およびその支持者たちは、この分野における動機と真実について責任ある発言者とならなければならない。なぜなら、あまりにも多くの人々がとても恐ろしい考えを広めているからである。これらの異様な発想は一様に誤りであり、しかも明らかな誤りである。真実を語る必要とされており、それはこの分野における探求者としての、我々の社会的責任の一部でもある。結局のところ、我々はこのプロジェクトを社会と無関係に遂行しているのではないのである。人々には真実を聞く権利がある。このことが特に重要である理由は、真実を知ることにより、この惑星の進化が

促進されるだろうということである。

私が参加した最近のあるUFO会議で、‘エイリアンによるキャトル・ミュートレーション’という残念な題目の議論があった。それがおぞましく見えるという理由で、現象にこのようなレッテルを貼るのは、軽薄というものである。だからそれは、悪意に満ちた解釈であることの証でもある。‘ポーギーとベス’の歌にも、こうあるではないか、“必ずしもそうじゃないぜ”ところで、私はたまたま肉食を好まない。だからこの事態について私は興味深く思うのだが、これらの切断事件を最も声高に叫ぶ人々は、なんと日に三度も肉を食べるのである。それが私にはどうにも理解できない。ここには大きなずれがある！ 私が思うに、人々は自らの情緒反応と、ETたちが家畜の切断を実行する際に抱いたかもしれない動機とを混同しているのである。我々の情緒反応とETが抱くかもしれない動機。その二つを混同しないことが重要である。異なる習慣、道徳、異なる倫理を持つ、まったく異なる文化と初めて遭遇するとき、ETによるとされる行為に我々人間中心の判断を下さないことが重要なのである。ETによるとされる行為に自分中心の判断を下すのは、白い肌を持つヨーロッパ人が北米やアフリカの先住民に遭遇したときに犯した過ちである。これらの有色の人々は、異なる習慣、異なる形態の社会組織を持っていた。そのために、悪魔のレッテルを貼られたのである。この傾向はさらに強まり、17世紀と18世紀の間、ヨーロッパ人は教会と王権により公式に、これらの先住民たちを人間としてさえ認めないまでになった。この自分中心の判断によれば、先住民たちは魂を持たないので、部族民を征服し、奴隷状態に置くことも正当化され得たのである。この国のアメリカ先住民たちの場合、彼らのほぼ根絶に近い虐殺も、同様にして正当化された。我々が地球外の人々と交流を始めるに際して、同種の過ちを繰り返さないよう、細心の注意を払うべきである。我々は、大変異なった環境にある惑星で進化した文明の行為を、誤解してはならない。これらのET文明の社会的および倫理的価値観は、我々が慣れているものと比べて著しく異なっている可能性がある。過去に我々が異文化との交渉を行なう際にしばしばそうであったように、もし我々が先入観を持ってETとの交渉に臨むという間違っただ行動をとるならば、それはきわめて大きな過ちになるだろうと私は思う。我々が互い同士を相手にして犯した過ちよりも、はるかに大きな過ちである。だから、我々はこのことについて注意深くならなければならない、結論を急がないよう、慎重かつ真摯でなければならない。

地球を訪れているET文明の重要性を思いめぐらすとき、我々はすべての言語が意識の反映であることを思い起こすべきである。我々が用いる言葉は、我々の意識を封入している。言葉には力がある。なぜなら、言葉こそが我々がどのように思考し、どのように行動するかを方向づけるからである。もし、人間-地球外知性体の関係を説明するときに使う我々の唯一の言葉が、‘誘拐’や‘動物切断’といった否定的な、恐怖に根ざした排外的なものであるならば、そのとき我々は、我々自身を被害者というまったく絶望的な牢獄に閉じ込めることになる。自ら宣言した被害者である我々は、地球外知性体との互恵的、開放的、直接的な関係を形成するために訪れるかもしれないどのような機会に対しても、それを思いつくことすらできず、ましてや生かすことなどできなくなるだろう。だから我々は、この現象を言い表すのにどのような言葉を使うのか、細心の注意を払わなければならない。特に

一般の人々に向けて話す場合にはそうである。集合意識の中で地球を訪れているET文明への認識がより大きな部分を占めるようになると、UFOゲッターから大量のメッセージが発信され、我々が突如として文化の主流に参入し始めるにつれて、この主題に責任あるやり方で対処する必要性が飛躍的に高まることになる。このテーマがナショナル・エンクワイアラー紙の中面を後にしてニューヨーク・タイムズ紙の第一面にたどり着くのも、それほど先のことではないかもしれない。我々は、信用を保つというだけでなく、我々の社会的責任を全うするためにも、使う言葉を選ぶに際しては十分慎重でなければならない。真実を話すことは、我々がそれを立証することができるという意味で重要なだけではない。真実を話すことにより、不要かつ不当なパニックと警戒を起こさせないという意味でも、それが重要なのである。私が思うに、この主題に取り組んでいる人々は、十分な社会的意識も社会的責任も示してこなかった。このことが特に言えるのは、いわゆる‘エイリアン誘拐’と‘動物切断’の分野である。

スティーブン・グリア博士  
著作権 1995年

(訳： 廣瀬 保雄)